

階段を駆け上がっていった

今日のこの快晴はカレンダーの上ではまだ残暑のものだ。しかし夏のあいだの暑さは完全に抜けていた。そして湿度はきわめて低いから、体で感じる空気はたいそう軽く、そのなかに満ちている太陽の光を全身で受けとめながら板張りの遊歩道を歩いていると、身も心も少しだけ浮き上がっているような錯覚があった。

その錯覚を楽しみながら、高村夏彦は遊歩道の階段に向けて歩いた。さきほどまで広いカフェの奥で広告業界の男たち四人といっしょに打ち合わせをしていた。写真家の高村だけがフリーランスだ。四人の男たちはカフェにとどまり、さらに別件の打ち合わせをするという。どこへいくときにも持っているライカのスナップを肩にかけているだけで、高村は手ぶらだった。男たちのひとりが書類を何枚かくれたが、折りたたんでジーンズの尻ポケットに押し込んだ。

分厚い板張りの遊歩道は建物に直すと三階の高さにあり、ターミナル駅から国道を越えて、何本もの線路の上を長く広く続いていた。百貨店、劇場、一階から六階まである大きな書店、いくつかの映画館などを、遊歩道はつないでいた。劇場と書店のあいだに階段で高くなった部分があり、その階段を上がると二軒のレストランそしてカフェがあった。カフェの外には天蓋が広く張り出し、

それが作る影の外の陽ざしのなかにも、テーブルがたくさん出ていた。どのテーブルも客で埋まっていた。

二軒のレストランとカフェとのあいだに花壇があり、その脇に階段があった。途中に踊り場をはさんで、その階段は上下ふたつに分かれていた。踊り場で階段は大きく方向を変えていた。踊り場の内側をその下の階段へと降りていく高村の外側を、下から急いで上がって来た女性が、高村の外側をまわり込みながら、その上の階段を駆け上がっていった。

視線を足もとに伏せていた高村の視界の縁を、その女性の姿が飛ぶように彼の後方へと移動した。良く出来た体だ、いいバランスをしている、そして駆け上がっていくための体の使いかたは、滑らかに軽く美しい。すれ違う瞬間にそんなことを感じた高村は、次の瞬間にはすでに反応していた。写真家として身につききった習性だと言っている。

踊り場に足をとめて振り向きながらライカを右手にとらえてフィルムを巻き上げ、ファインダーを右目へ持つていき、ファインダーと五十ミリ・レンズごしに、階段を駆け上がっていく彼女の姿をとらえたときはすでに、ファインダーのなかの二重像は完璧に重なっていた。シャッター・ボタンを押し下げた瞬間に次ぐ一瞬のなかで、高村はふたたびフィルムを巻き上げてもう一度シャッターをきった。階段を上がりきった彼女はすぐに見えなくなった。

とっさの反応がうまくいったことに軽い満足を覚えた高村は、二枚のうち最初の一枚は文句なしに素晴らしいはずだ、と思った。階段を降りながら彼はレンズの絞りを確認した。待ち合わせのカ

フェに向かいながら一時間ほど前にこの階段を上がったとき、今日のこの陽ざしに合わせて彼は本能的にレンズの絞りリングをシャッター速度に合わせておいた。

ファインダーのなかでほんの一瞬だけ見たいまの女性の姿を、遊歩道を歩きながら彼は思い浮かべた。素足にエスパドリーユ、そして淡いピンクのごく普通のスカートに、白い半袖のシャツ。いろんなものごとくさん入って重そうな、大きくて黒い革のシヨルター・バッグをたすきがけにし、右手で腰に押しつけていた。カフェでの待ち合わせに遅刻しているのだろうか。自分とおなじくらしい年齢ではないか、と三十五歳の高村はふと思った。

遊歩道を駅へ向かう途中、高村は立ちどまった。そして肩ごしに振り返った。自分はずいぶん忘れ物、あるいは忘れごとをしているだろうか、と彼は思った。なにかに気づかなくてはいけないのに、いっこうに気づく気配のない自分を知覚の片隅に感じるときとよく似た心理状態に、たったいま彼はなつた。忘れていることがあるなら、それはなになのか。なにに気づくべきなのか。今日は仕事はないし、ひとつだけの用事はすでに終わった。夕方までに帰宅すればそれでいいだけだ。妻の百合子も夕方には帰ると言っていた。

ふと、ごく軽く、高村は不安な気持ちになった。その理由がどこにあるのかわからないままに、彼はライカのフィルム・カウンターを確認した。フィルムはあと十八フレーム残っていた。駅の西口の飲食店街を歩き、残りを撮ってしまった。そしてラボへいき現像してもらおう。一時間で出来る。いまからなら十分に間に合う。現像の出来たりヴァーサルを受け取ってから自宅に向かえば、ちよ

うどいい時間に帰りつくはずだ。

彼は考えたとおりに行動した。駅の西口で線路に沿っている飲み屋横町を一往復し、本来なら夜の景色を昼の光で撮り、フィルムは終わった。地下鉄で銀座へいき、いつものラボにフィルムを預け、引き換えにフィルムを一本だけ買ってライカに装填した。そのあと喫茶店に入り、広告代理店との打ち合わせでもらった書類を読んだ。

写真家の自分にどんな写真が期待されているのか、わかりすぎるほどにわかるのだが、その写真はどうか考えても凡庸であり、こんなものでいいのだろうかという思いに、ふたたび不安な気持ちが重なるのを高村は自覚した。胸騒ぎ、とまではいかないのだが、心のどこかでなにかがごく軽く騒いでいるような気がする。その理由はなになのか。気づくべきことに気づかないままにそこが空白になっていて、不安な気持ちはそこから立ちのぼってくるように思えた。

書類をたたみなおしてジーンズの尻ポケットに戻し、喫茶店を出た。三十五ミリ一本だけの現像が出来上がるまでに、あと二十分あった。その時間を彼は歩いて過ごした。歩きながら考えた。打ち合わせを終えてカフェを出た自分は、階段ですれ違った女性を写真に撮り、ボードウォークを駅へと向かった。その途中で、なにか大事なことを忘れていたような、気づくべきことに気づいていないような、妙な不安感に似た心理状態となった。階段ですれ違いざまに撮った写真に、なにか問題があるのだろうか。歩きながら高村はそこまで考えを進めることが出来た。

ラボではいくつがあるライト・テーブルのブースで椅子にすわり、現像の出来たりヴァーサルを

ルーペで点検した。階段を駆け上がったあの女性のうしろ姿をとらえたフレームふたつを、交互にルーペ越しにのぞき込んで観察した高村は、それまでは思いもしなかったことを思い始めることになった。ひよっとしてこの女性は妻の百合子ではないのか、という思いだ。

ふたりが結婚して三度目の夏が終わりつつあったが、百合子があんなふうな階段を駆け上がることを、彼はこれまで一度も見ることがなかった。エスバドリーユは初めてだし、重そうにふくらんでいた黒く大きな革のショルダー・バッグも初めて見る。ピンクのスカートも見た記憶はない。白い半袖のシャツは好きなのでたくさん持っている。髪の毛とめかたが百合子ではないようにも思えるが、カラー・リヴァーサル・フレームのなかに二次元で精密に縮小されたこの女性の、どことは言いがたくゼンたいが、百合子にごく近い可能性は充分にある、と彼は思った。すれ違った一瞬、そしてライカのファインダーのなかに合焦させた一瞬という、ふたとおりの一瞬だけでは、その女性が自分の妻だとはわからない場合があるのだろうか。

どこにも寄り道せずまっすぐに、高村は自宅へ帰ることにした。ラッシュ・アワーの始まる前の電車に乗り、いつもの駅で降りた。なにか大事なことに気づいていないことからくる、妙な不安を誘う空白の部分はそのま胸のなかに残っていた。駅から歩いて四分、集合住宅の三階の部屋に戻り、よれよれのチノとTシャツに着替えて、彼は顔と手を洗った。濡れた顔をタオルで拭いているとき、突然に思い出した。

百合子のうしろ姿を、かつて一度だけ、しかも三十五ミリのフィルムにワン・フレームだけ、自分が撮影した事実が、彼の記憶のなかに蘇って現在のものとなった。結婚する直前、つまり婚姻届けを出しているこの部屋にも住み始める寸前、三年まえの一月の終わり近く、実家に用の出た百合子を彼は車で送っていた。彼は彼女の両親に挨拶をしたばかりだったから、家の前で彼女を降ろした高村は、友人から借りたその車を返しにいった。うしろのドアを開いて外へ出た百合子が、道からやや高くなっている敷地の階段へ歩いていく姿を、彼は運転席から見た。いつも持っているライカは隣の席にあった。階段を上がっていく百合子のうしろ姿を、どんぴしゃりのタイミングで、完璧なポーズで、そのワン・フレームだけ、運転席の窓から彼は撮影した。ライカのシャッター音は小さく静かだ。撮られたことに百合子は気づかなかった。

そのリヴァーサルはスリーヴのままファイルのなかに整理されている。いままですっかり忘れていた。したがって百合子にはまだ見せていない。三年前のこのワン・ショットのことを、今日の自分ももっと早くに思い出すべきだったのか。なにか忘れていたような気づいていないような、したがってどこか不安であるような気持ちの発生源は、ここにあったのか。

高村夏彦はそのリヴァーサルをファイルのなから探し出した。今日、階段ですれ違いに撮った女性のうしろ姿とともに、スキヤナーで取り込んでPCのスクリーンに呼び出した。縦画面のその二点をスクリーンのなかにならべた。そしてそれを高村は観察した。階段を駆け上がったいく女性が百合子かどうか、結論は出なかった。百合子の帰宅を待てばいい。そしてこのスクリーンを見せ、こちらの写真は三年前のきみだけど、今日の僕が撮ったこのショットも、ひよっとしてきみか

い、と訊ねればそれでいい。

自分の気持ちはこれで落ち着くはずだ、と彼は思った。だがそうはならなかった。なにかがまだ欠落していた。欠落はそのまま空白であり、空白は落ち着かない妙に不安な気持ちだった。そしてその気持ちは、よりはっきりとしていた。三年前の百合子のうしろ姿のワン・ショットを思い出す前にくらべると、不安な気持ちの輪郭がより明確になっているように、高村は感じた。なにかがまだ足りない。それはなにか。妻の百合子、旧姓・北野百合子という女性に、おそらく直接にかかわるなにごとかだ。それさえわかれば解決する、と高村は自分に言い聞かせた。

キッチンへいき冷蔵庫からペリエの瓶を取り出した。冷えているペリエをグラスに注ぎ、半分まで飲んだところでグラスをテーブルに置き、彼は百合子の寝室へいつてみた。百合子は作家だ。結婚する前には一冊だけだった短編集は、いまでは三冊になっていた。寝室と書斎をいっしょにした彼女の部屋は、彼の寝室からは独立していた。彼女の寝室の入口に立ち、彼はなかを眺めた。手がかかりがあるとすればここだろう、と彼は思ったからだ。あちこちさまよった彼の視線は、部屋の左側の奥にある、アルコーヴのようになったベッドのスペースへと動いた。視線はベッドに止まった。

そして彼は、あつ、と声を上げた。きわめて単純な反射として、そのような驚きのひと声になった。その自分の声とともに、彼は思い出した。心のなかの空白は消えていた。なにか忘れていたような、気づくべきことに気づいていないような、妙に不安な状態は、一瞬のうちになくなっていった。百合子のベッドにかけてあるシーツは、白地にさまざまな大きさの、黄色い水玉の模様だった。こ

れを目にとめた瞬間、思い出すべきことすべてが、現在の彼の内部へと、いつせいに帰還していた。彼はふたたびリヴァーサルファイルのなかを探した。十年前のリヴァーサルもわかりやすく整理されていた。見つけなければいけないワン・フレームは、すぐに見つかった。そしてそれをさきほどとおなじようにスキヤナーで取り込み、PCのスクリーンに呼び出した。この写真も縦画面だった。三点の写真が横長のスクリーンのなかにならんだ。そしてドアのチャイムが鳴った。百合子は帰宅するとかならずチャイムのボタンを押す。ドアの鍵穴に外からキーの差し込まれる音を受けとめて、彼は部屋を出て廊下を歩き、玄関へいった。

玄関へ入って来た百合子はドアを閉じ、

「ああ、重かった」

と言いながら、ふくらんでいる大きな黒革のショルダー・バッグを廊下に置いた。

「帰ってたのね」

百合子の言葉と笑顔を受けとめて、高村は充実して高揚した、厚みのある肯定的な興奮を覚えた。見つけるべきものを自分は見つけた。つながるべきものがすべてつながった。不安な気持ちを誘う空白は、もはやどこにもなかった。軽く片足を上げて百合子はエスパドリーユの紐をほどいた。スカートは淡いピンク、そして白い半袖のシャツ。沸き上がるようなうれしさをなけば抑えつつ、「やはりきみだったか」

と、彼は言った。